

RYOBI

本明朝 Book

これだ、これを待っていた！

プロを思わずうならせる書籍本文組み専用書体

リョービイマジクス株式会社 フォントシステム部

114-0003 東京都北区豊島5-2-8

phone: 03-5390-5830 facsimile: 03-3927-6397

<http://www.ryobi-group.co.jp/imagix/font/>

TYPE COLLECTION
high quality digital typeface

本明朝-Book

本明朝 — Book 創世記 —

* 文中に記載されている会社名、製品名は各社の商標または登録商標です。

* 本明朝はリヨーピイマジクス株式会社の登録商標です。

* この文書中の仕様は予告なしに変更されることがあります。

* 本書は組版工学研究会によって執筆・編集されました。

二一世紀の本格本文用書体の開発をめざして

世紀末を控えた一九九九年三月、書体開発における一通の企画書がリヨービイメージクスフォントシステム部の企画会議に提出された。それが「本明朝-Book」開発のすべての起点となつた。

このころすでにハイエンドDTPユーザーは成熟しており、リヨービにも本文用書体に関して広範な要望が寄せられていた。この年にはまた、リヨービではきたるべき二一世紀に向けて本明朝シリーズ全体の字体と形姿を全面的に統一して電子活字としてのリニューアルを終えていた。

同時にリヨービでは「伝統書体シリーズ」としての花胡蝶、花蓮華、花牡丹の意欲的な開発がスタートしていた。そこにさらに本文用としての本格書体の開発が提案されたのである。

本明朝-Bookの開発決定までには実にさまざまな議論があつた。

中心は——これからわが国の本文用書体には何が求められるのか——であつた。

きたるべき新世紀もしくはデジタル環境における次世代においても、本文用書体の中心はやはり明朝体であろうとなつた。つまり明朝体は読者の視覚にもつとも馴れた活字書体であること、そしてまたリヨービにはもつとも評価の高い本明朝シリーズがあつた。これをさらに検証し精度と品質を向上させることが決定した。

一、判別性と可読性を重視して、適度な黒みと安定感のある新書体の創造。

一、活字本来の柔軟性の再現のためにデジタル効果の過剰な露出を避けて、エレメントに人の手技としてのアナログの要素を取り込むこと。

一、書籍と雑誌の本文用専用書体として使途を意識すること。そのために句読点、括弧などの約物の位置や大きさを再検証すること。

一、縦組み用・横組み用の専用かな書体を開発すること。またふりがな(ルビ)用のかな書体の開発も重視すること。

一、和欧混植に際して本格的で多彩な組版の実現のために、従来の枠組みをこえた

本格的な欧文書体を開発・導入して同梱をはかること。

同時にすこしでも奇異な形姿の登場を避けることや、独自の字体の解釈を避けることも決定した。新書体はあくまでも広範な読者からの評価の高い本明朝シリーズを基盤として、単なるシリーズの拡張を超えた文字組版のプロフェッショナルを満足させるものであり、充実したキャラクタの提供、最新の組版環境への対応なども同時に決定した。

ともするとわが国の代表的な本文用書体としての明朝体には、その使用範囲がありにも広範囲に設定されてきたきらいがあった。大きなサイズから小さなサイズまで共用できることや、縦組みにも横組みにも対応できることが求められてきた。現在本明朝-Bookは開発の最高潮にある。その開発の熱い鼓動をここに記録する。

重層的かつ複合的な本明朝-Bookの開発コンセプト

本明朝-Bookはあくまでも本明朝シリーズのなかにある新書体として、その字体と形姿は既に先行して販売されている本明朝シリーズと同一のものとして使途に応じた多様な選択に応じられるようにした。

そのウェイトと黒みは本明朝-Lと本明朝-Mのほぼ中間においた。

また横線を幾分太め、ふところを幾分しづかって、後述するダズリング・イフェクトの発生を防止した。

本明朝-Bookの両がなの字面は本明朝-Mよりも小振りとして、ベタ組みでの安定感と紙面の解放感を獲得した。

そのおもな理由はいわゆる新印刷方式の登場と普及にあった。つまりオンデマンド印刷や、製版フィルムを使わないCTP印刷の普及によって、従来の明朝体のウエイトでは書籍や雑誌の文字組版印刷においては細すぎたり太すぎるという傾向がみられたからである。

使用適性サイズはほぼ一一Qから一六Qの本文用サイズとして設定した。

これには少しばかり説明が必要であろう。活字書体とは長らくのあいだ視覚補整対応方式 (Optical Scaling) によって造られてきたという歴史がある。すなわち金属活字の歴史のなかでは五五〇年余にわたって書体の基本デザインを変えずに、判別性と可読性の向上のために活字サイズの大小の変化に応じて、大きなサイズではカウンターを狭めたり鋭角な線質をやわらげたりしてきた。また小さなサイズではカウンターを広げたり、線質を明瞭な構成に切り替えるなどして、それぞれの活字父型に視覚補整をほどこしながら彫刻・描画してきたという歴史があつた。

それが機械式活字母型彫刻機 (ベントン) の登場を見てからは、急速に比例対応方式 (Linear Scaling) の活字書体設計法に変化した。この方式では一あるいはほんの少數のサイズの文字原図だけで、すべての活字サイズに一律に比例的な縮小または拡大をさせて対応する方式となつた。また光学式写真植字機はほとんどすべてがこの方式であり、現在の電子活字においても同様である。

活字原図の比例対応方式には長所も多いが、やはり大きなサイズではカウンターがゆるくなつて間延びした文字形象となつたり、小さなサイズではカウンターが狭

まつたり、細線部が不明瞭になつて判別性に劣ることがあつた。すなわち、本明朝-Bookにおいては組版適性サイズを限定することによつて視覚補整対応方式——オプティカル・スケーリングを実現させたともいえた。

また同時に本明朝-Bookの開発に際してはダズリング・イフェクト (Dazzling Effect) の解消をつよく意識した。ダズリング・イフェクトとは幻惑効果のことであり、タイポグラフィ用語においては目がチカチカして読みづらいことをいう。つまり様式化されて硬質な線が際立ち、水平・垂直線の線の太さの差が大きく異なつて、彫刻の特徴が際立つた硬質な画線がもたらす強いコントラスト、つまり明朝体漢字全般に避けがたく発生する幻惑効果への対応をわが国でははじめて試みたものである。

また組み方向は標準を縦組みとして、センターアー軸を中心に厳格な検証を加えた。すなわち快適な読書を目指すには何よりもセンター軸がすつきりと通り、揺らぎのない組版表情が安定感と信頼感をもたらすと判断された。書籍・雑誌の組版印刷や読み物としての大量文書処理などの本文印刷用の市場にターゲットをしづつた前例のない電子活字を意識して開発に着手した。

横組みへの対応は、組版ソフトウェアなどのアプリケーション・ソフトの充実と

展開によつて、漢字書体の形姿は変えずに、おもにはかな書体の充実をもつて臨むことにした。すなわち本明朝-Bookのかな書体は、標準がな、小がな、新がな、新小がなの四種類をあらたに設計した。またそれに中心軸を重視し、ひらがなとカタカナの大小関係を厳格に設定した縦組み用と、ベースライン揃えを重視した横組み用を用意したので、本明朝-Book OpenTypeフォントには都合一二種類のかな書体があることになった。当然プロポーショナル・ピッチ（いわゆるツメ組）もOpen Typeフォーマットとアプリケーションに依拠しながら実施できるというプロフェッショナルの要望を最大限に取り込んだ、きわめて意欲的な開発となつた。

本明朝-Book の基本エレメント

本明朝-Book の基本骨格は本明朝-M をベースとし、コンピュータ・スキルの支援によつて制作している。字枠に対する字面の設定は本明朝-M と比較して、標準がなであつても、ひらがな・カタカナとも数値は異なるが、いくぶん小振りの設定になつてゐる。

リヨービイマジクスの前身、晁文堂にはいつからともなくこんな口承があつた。

「左ハライは日本刀、右ハライは青竜刀にまとめよ」

本明朝-Book にはこうした先輩からの口承が採用されて、金属活字から写植活字の時代を経験してきたリヨービならではの工夫が随所にこらされる結果となつた。すなわちデジタルとはいながらもアナログの長所を積極的に取り込んだ書体開発となつた。

左ハライの先端部はフエンシングの刀のように細く長く抜けていく形姿や、振り払う形ではなくて、最後まで上部の画線のそり上がりを抑制しながら長く引き、日

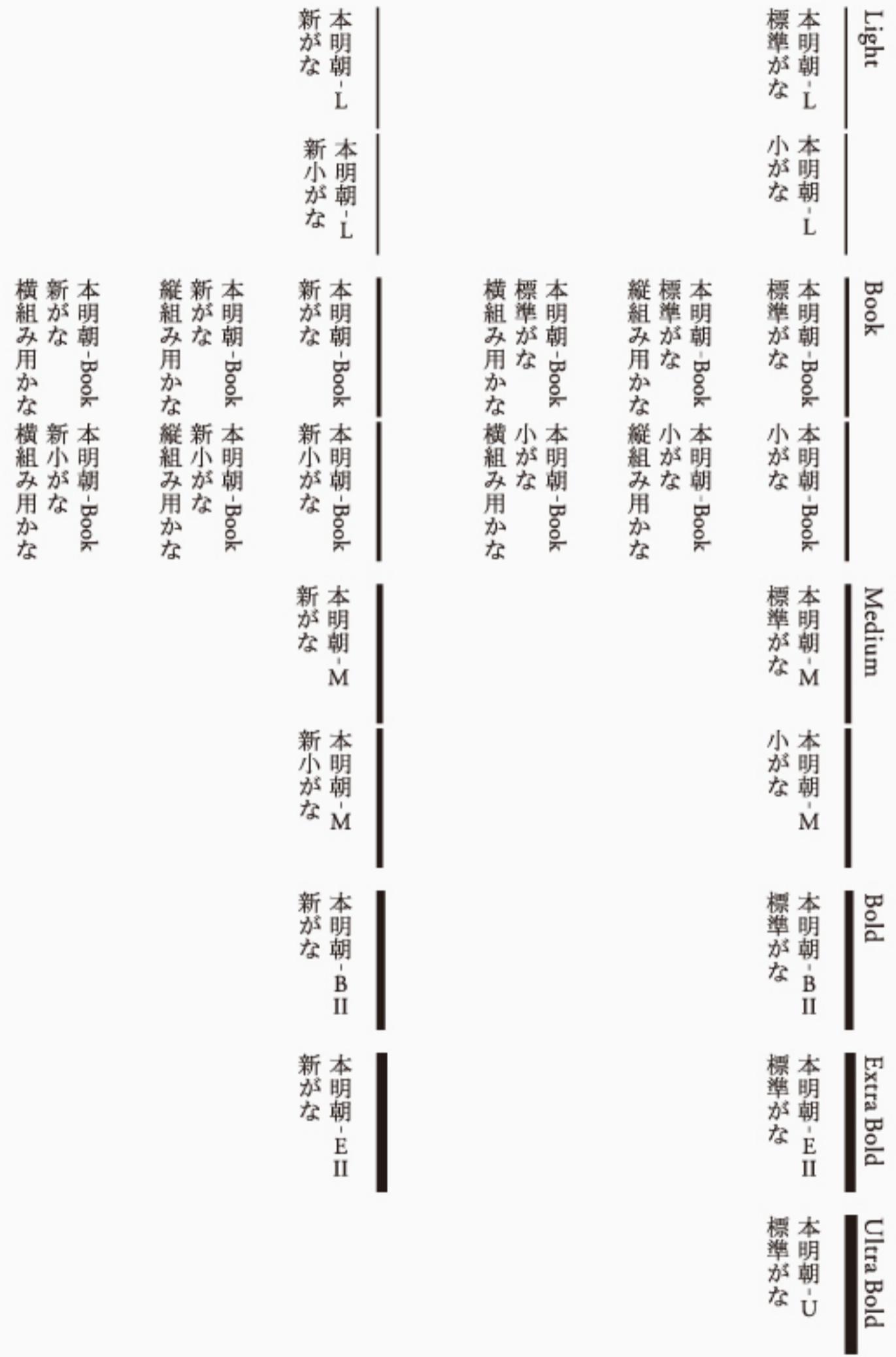
本刀のようにして、終筆は直角に切断した。これは使用サイズを限定したために大きなサイズへの配慮をしなくてもすむことになつたためで、本文用書体として画線の先端が視覚に突き刺さることを防止することを狙いとしている。

右ハライにも中国の青竜刀のように肉厚で力強く外側に払う形を選択した。これも紙面全体が白っぽくなつて、一部の画線のコントラストが際立つてダズリング・イフェクトが発生することを予防するためになされた結果である。同時にまた文字の重心が下に降りて安定感をもたらすことができるという配慮からなされたものである。

縦線の終筆部にも大きな工夫がなされている。それは読書における視覚にとつては、活字の縦線の画質は幾分異質であり、強く印象づけられるためになされている。つまりその終筆を直線にまとめてしまうと、人の目には扁平足のようへこんでみえることへの対応としてなされている。本明朝-Bookの縦線の終筆部はわずかに膨らみがあり、やさしいカーブを描いている。

このような微細な配慮と工夫を重ねて、本明朝-Bookはいま開発が進行している。すべての努力は快適な読書のために、そして快適な文字組版環境の提示のためにとづいて開発が進行している。

本明朝の書体体系図



本明朝ファミリーのウェイト設定（標準がな）

本明朝-L

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝-Book

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝-M

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝-B II

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝-E II

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝-U

威風堂々の本格派書体は、本明朝をお選びください。

本明朝の歴史

1958年 昭和33年

本明朝の源、金属活字「晃文堂明朝」が登場。

1960年 昭和35年

写植用書体「細明朝」として発売。

1982年 昭和57年

全面改刻して「本明朝-L」として発売。

1982年 昭和57年

ファミリーとして「本明朝-M」「本明朝-B」が誕生。

1983年 昭和58年

ファミリーとして「本明朝-E」が誕生。

1987年 昭和62年

「本明朝-B」を改刻して「本明朝-BII」と命名。

1987年 昭和62年

「本明朝-L」をデジタル化。

1990年 平成2年

「本明朝-M」「本明朝-BII」をデジタル化。

1994年 平成6年

「本明朝-E」を改刻して「本明朝-EII」デジタル化で誕生。

1999年 平成11年

本明朝ファミリーの字体・形姿を統一してリニューアル。

1999年 平成11年

「本明朝-L,-M」に新しい仮名「小がな、新がな、新小がな」誕生。

2002年 平成14年

「本明朝-BII,-EII」に新しい仮名「新がな」誕生。

2003年 平成15年

ファミリーとして「本明朝-U」が誕生。